学びや タイムスリップ

大人の子の見方分かる

明治初期に小学校が創設された頃は、新しい時代にふさわしい「学校で学ぶこと」と、江戸時代からさほど変わらない「実際の生活」とのギャップが大きく、なかなか就学率が伸びませんでした。

1900（明治33）年に小学校の授業料が無償化され、日露戦争の時期を経て都市部で近代的な生活が定着しつつあった09（同42）年、ようやく小学校就学率が98%を超えました（ただし農村部では「就学」していても「通学」できない子どもがたくさんいました）。

このように明治後期以降、就学率が大きく伸びた背景の一つに、教科書が分かりやすくなったことがあります。1900年文部省検定済の教科書『国語読本 尋常小学校用 巻一』を見てみましょう（写真1）。これは、内容が実際の子どもの能力にあわせて平易でわかりやすくなった教科書の典型です。

しかしその一方で、挿絵は今日から見ると、「子ども向け」という感じはあまりしません。つまり、文字を学習するという点では「子ども向け」が開発され実用化されたのですが、挿絵においてはまだ大人と子どもの区別が今日ほどついていなかったのです。

「さるかに合戦」は、以後の読本教科書の定番となるので、昭和の教科書と比較することで教科書の変化を追ってみましょう。

写真2は、31（昭和6）年の満州事変の後に編さんされた1年生用の教科書です。このシリーズから一部の挿絵がカラーになりますが、「さるかに合戦」の挿絵では首より下が人間である様は変わっていません。やはり、今日の子どもが見ると、「怖さ」があるかと思います。

写真3は、41（同16）年に小学校が国民学校になった時から使われた1年生用の教科書です。この教科書から、「さるかに合戦」のキャラの描き方が大きく変わり、現代の私たちの目から見ても親しみやすさがあります。

このように、教科書の変遷を追うことで、それぞれの時代における「子ども」が大人によってどのように見られていたかが分かります。

（京都市学校歴史博物館学芸員 和崎光太郎）

◇

今回紹介した教科書は、学校歴史博物館（下京区）で実物および拡大版レプリカが見られます。

㊤写真1、坪内雄蔵著『国語読本 尋常小学校用 巻一』（1900年）㊥写真2、文部省編『小学国語読本 巻二 尋常科用』（1933年）㊦写真3、文部省編『ヨミカタ 二』（1941年）